

『リモージュ司教にしてガリアの使徒である  
聖マルシアルの伝記』(XXI-XXVII) 試訳

渡 邊 浩

## 凡例

1. 本訳文は *Vita eivsdem S. Martialis episcopi Lemovicensis et Galliarvm apostoli, conscripta ab Aureliano Lemovicensium episcopo, Divi Marcialis auditore olim eius beneficto à mortuis excitato edita vero ex MS, Ecclesiae S. Marcialis Parisiis à R. Fr. Thoma Beaulxamis Carmerita: in L. Surius, De probatis sanctorum vitis* (Cologne, 1618), 6: 365-374 の試訳である。前々回・前回に引き続きここに訳出したのは、21章から最終の27章までである。なお、このテキストの入手に当たってはマルティン・ルター大学図書館 (Martin-Luther-Universität Halle-Wittenberg, Universitäts-und Landesbibliothek Sachsen-Anhalt) からマイクロフィルムの提供を受けた。この場をお借りしてお礼を申し上げたい。
2. 現代語訳としては R. Landes et C. Paupert, *Naissance d'apotre: La vie de saint Martial de Limoges*, Turnhout, 1991, pp.45-104 に仏語訳があり、翻訳に当たってはこれを参照した。
3. 仏語訳における各章の表題は原本の欄外に書かれた文章である。これら欄外の文章は単なる表題ではなく、最初の一、二文を除くと、欄外註のようにアルファベットが付され、本文の当該箇所と対応している。この試訳でも仏語訳にならって欄外の文章を各章の表題としたが、アルファベットは残した。また、原本ではページ毎であったり章毎であったりしたアルファベットの振り方を、ここでは章毎に統一した。さらに、アルファベットを欠いた文章について、訳者がアルファベッ

トを補い、本文との対応関係を示した箇所もある。

4. 固有名詞はラテン語読みを基本としたが、聖マルシアルや聖ペテロなど、慣用化した呼称を用いた場合もある。
5. 聖書の引用箇所の指摘については、原本よりも詳細な仏語訳に基づいたが、訳者が訂正した箇所もある。また、訳文は原則として『新共同訳聖書』に従った。

**XXI. 聖マルシアルは悪霊と偶像に命ずる。悪霊のこの姿が見る者たちにとって恐ろしいのは、悪霊たちは退けるべきと学ぶためである。a) 悪霊によって像が碎かれる。b) 十字のしるしが持つ力。c) 聖マルシアルは啓示によって使徒ペテロとパウロの殉教を知った。**

その後、至福なるマルシアルはマウリカニアから引き返し、リムーザン人の土地に戻って来た。ところで、ステファヌス公は、前述のように、至福なる乙女ヴァレリアの墓の上に教会を建てるよう命じていた。さらに公はそこに多くの贈り物を捧げたが、それらについては後に数え挙げることにしよう。聖マルシアルはこの立派に献堂すべき教会を、自らの座を献堂したときと同様に、血縁者で最初の殉教者である至福なるステファノを称えて聖別しようと望んでいたのだが、彼はまずアウシアクムという町に入った。そこにはユピテルの像が建てられていて、異教徒たちはこれを大いに崇めていた。この地には病んでいる者たちやありとあらゆる病に苦しむ者たちが大勢いた。そして、いとも聖なるマルシアルが前述の町にたどり着くと、この地の住人たちは、像に言葉を語るよう命じて欲しいと彼に嘆願し始めた。というのも、彼らは、像が至福なるマルシアルに付き従う天使たちに火の鎖で縛られていると言っているのを聞いていたからである。そこで彼は微笑んで言った。「不実な悪霊よ。お前はこの像の中から欺いた者たちに常々託宣を与えてきたが、私は我らの主イエス・キリストの名においてお前に命ずる。この像から出よ。そして、ここにいる皆に正体分かるよう、皆が見て理解できる姿形となってその像を打ち碎け。」彼の言葉を聞くと、悪霊は像を出て彼らの前に現れた。すなわち、それは黒人の幼い子どものように煤よりも黒く、その醜くて濃い頭髮は足まで垂れ下がっていた。そして、その口と鼻と目からは炎の部分から悪臭を放つ火が燃え出していた。これを見ると、

敬うべき神の使徒は人々の方に向き直って言った。「ご覧なさい。あなたたちに見えているのが、あなたたちが神として崇めていた者です。彼にもあなたたちにも、何も喜ばしいものがあり得ないことを知りなさい。」それから、悪霊の方を向くと、彼は言った。「既に言ったように、私は主の名においてお前に命ずる。この像から出よ。a)そして、それを粉々に砕き、荒地に行け。人々に害を加えることなく、審判の日までそこに留まれ。」この声を聞くと、悪霊は像を粉々に砕き、その後はどこにも姿が見えなくなった。ところで、いとも至福なるマルシアルはすぐに自分の周りにあらゆる病人と、様々な病を患っている者たちを集めさせた。そして彼らの上でb)十字の聖なるしるしを切って、皆に健康を取り戻させた。ところで、その場にいたと思われるすべての者たちが洗礼を受けた。それから、その地を後にすると、c)使徒マルシアルは予感を抱いて自分の土地へと戻った。

**XXI. 聖マルシアルは自らの墓の場所を選ぶ。聖ステファノを称えて捧げられた祭壇。a) 聖堂に調えた品々。b) 聖ペテロと聖パウロを称えた礼拝堂。c) 聖堂で絶えず灯される明かり。d) 金の十字架。e) 聖堂の聖別。f) 献堂式の日には催される祝宴の準備。g) 献堂式の祝典。h) 放浪する者たちは疲れから回復する。i) その献堂式におけるミサの挙行。j) 妻とともに悪霊に取り憑かれた若者が聖マルシアルによって癒される。k) 不服従が悪霊に近づく隙を与える。l) ふしだらな悪霊たちにとって情婦である。m) ミサの犠牲がミサの挙行者と人々のために捧げられる。n) ミサを挙げる聖マルシアルは天の光に包まれる。o) その聖堂はいつ献堂されたのか。p) 聖堂に任じられた司祭たち。q) 聖堂の12人の番人。r) 毎日500人の貧者を回復させるための施療院。s) 朝の8時に至福なるマルシアルによってミサの犠牲が捧げられる。t) 司教としての祝福。**

その時、彼は、少し前に起こった聖なる使徒ペテロとパウロの尊い死を幻視によって知り、また自らの使命が果たされたので、至福なる乙女ヴァレリアの所有地に彼自身とステファヌス公が建て始めていた礼拝堂を、大急ぎで完成させるよう命じた。そして、その礼拝堂の西側部分の埋葬場所に自らの墓を造り、またその後ろの別な墓穴には、ステファヌ

ス公が彼に頼んでいたとおり、公の棺を置いた。ところで、彼は公の墓の中心の上層部で、最初の殉教者で彼の血縁者である至福なるステファノに捧げた祭壇を聖別した。この祭壇は、我々が既に述べたように、彼が神聖な幻視によって使徒ペテロとパウロの殉教を知る以前に、はじめは至福なる乙女ヴァレリアの墓の上に置くことにしていたものである。

a) そして、彼は至福なるステファノのこの祭壇全体を周りに金の釘を打って据えた。また、6つの金の冠を円形に置き、明かりとして並ぶように同数の金のランプを配した。b) また、彼は前述の礼拝堂の他にもう一つの礼拝堂を、自分の墓の前に、使徒たちの頭で自分の近親者である至福なるペテロを称えて建て、祭壇の四隅に金の冠を配した。c) さて彼はその祭壇の前に、金でできた清楚なランプを7つ置いたが、それは朝夕にそこで明かりが灯されるためであった。さらに、彼は5つの金の燭台と1つの金の香炉を作るよう命じ、また教会の装飾を仕上げ、祭壇での勤めを果たせるように、d) 同様に金の十字架を1つ作るよう指示した。

これらのことがすべて完了すると、彼は、主の抜きん出た、たいへん尊い弟子、すなわちステファヌス公を自分のところに呼んで、彼に言った。e) 「全能の神と彼の聖人たちを称えて、この住まいを聖別しましょう。それは私たちが自分たちの体を離れるとき、神ご自身が愛情深い褒美の分配者、気前のよい報償者として、姿を現してくださいるためです。」この言葉を聞くと、f) 公は自分の王国のあらゆる地方から十分な小麦と多量のぶどう酒を徴収し、さらに、肥えた雄牛、雌牛、家禽、それから他の肉類を大量に集めさせた。彼はまた、町の周囲に仮設の小屋を多数建て、あらゆる種類のテントを張るよう命じた。そして次のように指示を出した。g) すなわち、彼の支配に従う者は皆喜び楽しむように、また心を躍らせて献堂式の祝典に参加しようと心がけるように、と。さらに、彼は、あらゆる富者、貧者、h) そして放浪者に、彼らが欠いていると思われる物を十分に与えるよう命じた。さて、いとも至福なるマルシアルは、皆を呼び集め、彼らに言った。「明日のために準備をしなさい。つまり、体を清潔にして心を清め、天使や主の聖人たちとともに、主を受け入れるのに相応しい者となりなさい。そして、肉体から出て行こうとするあなたたちを、主が受け入れたいと思われるように、また、それらの

天使や聖人たちといっしょに、あなたたちが主とともに永遠に住まうことを主が許してくださるように、しなさい。」i)翌日、このいと至福なる人物が荘厳ミサを挙げていると、そら、突然に、j)ある若者、トゥールの町のアルネウスという伯が、その妻のクリスティーナとともに、悪魔に捕らえられた。使徒は彼らがこのような苦痛を受けるのを長く耐えることができなかった。それどころか、彼らが激しく痛めつけられるのを見たので、彼は二人にそばに来よう命じ、そして悪霊たちに話しかけた。k)「汚らわしい悪霊どもよ。お前たちはなぜ大胆にもこの者たちに入り込んだのか。」悪霊たちは答えた。「それは、こいつらが、あんたが昨日命じた掟、つまり今日の日まで用心して貞潔で清くあれという掟に、従わない者たちだと分かったからだ。こいつらはその掟を一つも守らず、l)肉のみだらな行為と恥ずべき放蕩で互いを汚し合い、一晩中を過ごしたのだ。この機会を逃さず、俺たちはこいつらの中に入ったわけだ。」これらの言葉を聞くと、人々は公とともに、苦しめられているこの者たちを悪霊の罠から解放してくれるようにと、いと至福なる人、マルシアルに祈り始めた。すると至福なるマルシアルは悪霊たちの方へ向き直って言った。「我らの主、イエス・キリストによって、私はお前たちに命ずる。この者たちから出よ。そして今後はこの者たちの中に戻る事が許されるなどと思うな。」悪霊たちはこの命令に従って、取り憑いていた者たちから離れ、立ち去った。さて、夫とその妻は健康を取り戻すと、神を賛美し始めた。ところで、主は至福なる人に大いなる恩寵をもたらした。それは、m)彼が自らと人々のために犠牲を捧げんと荘厳ミサを執り行なっていたとき、神の哀れみが天からその聖堂に放った光の明るさが大変強かったため、まさしく人は自分の隣りの人を見ることができた、というほどのものであった。n)さて、使徒自身の上と彼の周囲には、主の栄光ばかりか、神の光、神の威光が溢れたが、それはいかなる言葉でも説明できないほど、だれも目を伏せずにはいられないほどのものであった。

o)ところで、聖ペテロのその聖堂は皇帝ネロの時代、すなわち彼の治世の14年目の5月1日に聖別されたが、その年にはネロに代ってウェスパシアヌスがローマ帝国の元首の地位を受けた。そしてステファヌス公はこの献堂式を後援し、心を躍らせて参加したいと願っていた。祝典が

滞りなく終わると、p) 至福なるマルシアルは、ステファヌス公とともに、この同じ教会に司祭たちを任じた。彼らは毎日そこで聖務を果たし、敬虔に生活を送り、自ら身を捧げた神のために熱心に戦う者たちであった。すなわち、聖マルシアルがアウレリアヌスとともに死から蘇らせた彼の仲間のアンドレア。そして同じく彼によって蘇らされていたアキテーヌ伯アルカディウスの息子のヒルデベルトゥス。そして、そこで休むことなく全能の神に熱心に仕えることとなった他の 36 人の聖職者たちである。確かに、ステファヌス公は自らの資産から、彼らのために食糧と十分な衣服を提供するようにし、貧困や物資の窮乏に陥ることなく、彼らが敬虔な生活のうちにも暮らせるようにした。q) さらに、公は教会に番人を置き、彼ら 12 人にきちんと守られるよう聖別した資産を分け与え、彼らがそこから衣食に必要な分を得られるよう定めた。r) 公はまた、貧者のために施療院を建てるよう命じ、そしてそこでは毎日 500 人の貧者を受け入れて回復させるよう指示し、また彼らが食料の施しを得られるよう定めた。

ところで、聖堂の献堂式の 3 日後に、使徒は、幼児から老人まで、集まっていた人々をすべて呼び集め、彼らに励ましの説教を行い、夜明けから第 8 時までそれを続けた。さて、s) 第 8 時に、彼は自らと集まった人々のため主に犠牲を捧げ、t) そして祝福を与えて次のように述べた。「全能の神はその恩寵によって私たちを祝福し、あらゆる悪から私たちを守ってください。そして、あなたたちは神に敬意を表して教会の献堂式に来たのですから、神は、私たちが良い行いを続けられるようにしてくださいように。また、神の命令であなたたちがこの世を去るとき、あなたたちが聖人たちの集いに喜んで加えられるに値するほど、申し分のない者となったことを分かってくださいように。神が私たちにそのような機会を与えてくださいますように。その方の王国と支配は世々に限りなく続くのですから。アーメン。」それから彼は人々を送り出し、各々は平和のうちに家へと帰って行った。

XXIII. 断食。節制。アウレリアヌスは聖マルシアルによってリモージュ司教として聖別される。a) アウレリアヌスは生前に奇跡によって輝く。b) マルシアルは徒歩で様々な地方に福音を述べ伝え、司教区内を訪ねる。c) マルシアルは常に神への賛美を口にする。d) 用心すべき無駄な言葉。e) 司教の布告。f) 奉納物。g) 灯火。h) 隠し事を見通す力。i) 聖マルシアルは相応しくない者たちに聖体拝領を許さない。j) 三位一体についての説教。k) 信仰の要点。l) 素行について。m) 奇跡。n) アウレリアヌスは自分がこの伝記の著者であることを明らかにする。o) 彼は聖マルシアルの死を語る心の準備をする。

かつて至福なるマルシアルを彼の弟子たちとともに鞭で打ちつけた神殿の祭司たちは、その後、断食、徹夜の勤め、不断の祈り、そして善行を示すあらゆる機会において、彼に付き従った。実際、彼らは晩課の時間まで断食し、パンと水以外にはいかなる食物もまったくとらなかった。そこでいとも至福なるマルシアルはアウレリアヌスを祝福すると、彼を叙階し、自らの死後に備えて、リモージュの町の長とした。一方、アンドレアを自分が埋葬される教会の司祭に任じた。a) ところで、キリストのはかり知れない好意は、アウレリアヌスに大いなる恩寵をもたらしたので、多くの力あるしるしが彼を通して為され、また彼の祈りによって病人たちの四肢が数多くはたらきを取り戻した。b) ところで、主の聖なる方は、ガリアの一つ一つの町で説教するため、村々や城塞で福音を述べ伝えるため、あるいはリムーザンとアキテーヌ地方全域を巡って、まだ教会のなかったところに教会を建てるため、至る所に赴いたが、馬であれ驢馬であれどんな家畜であれ、それらに乗って出かけることはなく、また足に履き物を履いて行くこともなかった。それどころか、自分の主にして師であるイエス・キリストの教え、イエスが彼と他の弟子たちに常々命じていた教え、すなわち「町から町へ、財布も袋も履き物も持っていくな」(「ルカによる福音書」10章4節)という教えに従って、彼は裸足で歩いて出かけた。そして主が命じた万事において、キリストに倣う者として、また使徒の頭で自分の近親者である至福なるペテロに倣う者として、振る舞おうと心がけていた。c) 確かに、彼は自らの聖なる座、聖ステファノ教会に帰ったときでも、賛美歌と祈りの生活に戻って常に主を称えており、そして口の中で絶えることなく神への賛美を唱え

た。d) また、彼の主にして師の言葉、すなわち「人は自分が口にしたあらゆる無駄口について、審判の日にそのことを釈明しなければならないだろう」という、主自身が彼と弟子たちに語った言葉を、彼は折にふれて皆に公言し、またそれを信じ恐れるよう皆に説いた。

さらに、そのいとも聖なるアキテーヌの博士は、リムーザンのあらゆる地方と、アキテーヌと境を接する地方に、次のような布告を出した。

e) この国に住む者たちは、毎年四季の齋日ごとに、交代で、彼の聖なる座である前述の教会、すなわち聖マルシアル自身が8年間司教として座を占めた、最初の殉教者ステファノを称えて聖別された教会に来なければならない。その際、奉納すべき捧げ物として、祈りの贈り物と嘆願の供え物を、灰と粗衣を身にまとい f) 奉納物と g) 明かりを手を持ってくるべきである。かくして、彼の敬うべき骨壺が墓に納められることとなるその場所に来る者たちは、そこに3日間続けて留まらなければならない。そして、祝福を受け、同時にそのいとも聖なる牧者から信仰の報酬として罪の赦しをもらい、3日間の断食を敬い守った後、それぞれ自分の家に戻るべきである、と。ところで、主は聖マルシアルに多大な恩寵を与えられたので、h) 彼は人の意識を十分に知ることができた。すなわち、皆がキリストの聖体と血の交わりに与ろうと願っているときに、助祭が習慣に従って「もしだれかそれに与ることができない者があれば、その者は教会から出て行かねばならない」と述べた後、彼はそのすべての者たちに、彼らがいかなる誘惑に駆り立てられているのかを明らかにすることができた。また、各自がその晚いかなる考えや汚れた行為に耽ったかを明らかにしてみせることができた。i) そして、彼はキリストの聖体と血による交わりに与ることを禁じ、次のように言ったのであった。信者のうちのだれも、もしその者が清くないならば、キリストの聖体を受けてはならない、と。ともかく、彼は神の知識で満たされ、敬虔さで際立ち、素行の正しきで優れ、奇跡を示すことにおいて目を見張るものがあつた。彼はこの世界を軽蔑する者であり、神と隣人を愛する者であり、そして彼にとって、「生きるとはキリストであり、死ぬことは利益を得ること（「フィリピの信徒への手紙」1章21節）」であつた。j) 彼は唯一の神が三つの位格において現れることを教え、k) 主イエスは人類の救済のためにマリアから肉体を得たこと、そして体も成長して完全な大人



となったこと、を教えていた。l) 彼は、徳を追い求め、また細心の注意を払って、あらゆる過ちや罪から遠ざかるよう励ましていた。彼は、夫婦の貞潔は良いこと、寡婦の節制はより良いこと、処女の完全さは最良で天使に近いこと、と教えていた。そして、だれもこの説教を侮ることができないと言うことは、彼がキリストの名において行っていた種々の奇跡の偉大さが納得させていた。m) 彼は足の悪いものには歩みを、口のきけないものには言葉を回復させ、そして死者たちを再び生へと呼び戻していた。

キリストの恩寵により彼を通して行われたことが知られている奇跡で、言及に値するものは他にもたくさんある。だが、もしそれらが文字に書かれるなら、不信心な者たちからは偽りであると言われるであろう。n) 確かに、私、アウレリアヌスはすべてを知っているわけではなく、私が彼に洗礼の聖なる水で生まれ変わらせてもらう前については、彼によって為されたことを十分に見聞しているわけでもない。それでも、私が彼によって地獄の牢獄から光へと連れ戻された後については、彼の弟子たちとの交際を通して聞くことができ、あるいは——彼自身はほとんど語らず、自身についてたいいはいは隠そうとしたけれども——彼自身の口から聞くことができ、またあるいは、私自身の目で見ることができた。私は必要なことには最大限口をつぐまないよう心がけた。o) とはいえ、これまで彼の素行と振る舞いについて語ってきたが、ここからは、彼がいかにしてこの世を去って、望んでいた勝者の栄冠という栄光に到達したかについて、再びペンを進めることにしよう。

XXIV. a) 聖マルシアルが死去した年(紀元 74 年)。b) イエスが聖マルシアルに現れる。c) 聖マルシアルは歓喜する。d) 仲間の聖人たち。e) 聖マルシアルは自分の信者たちを、最後の言葉をかけようと呼び集める。f) 人々は皆嘆き悲しむ。g) 間もなく死を迎えようとする者が行う準備。h) 夜の第 2 時にミサが挙げられる。

a) 我々の主、イエス・キリストの復活後 40 年、皇帝ウェスパシアヌスの治世の 3 年目、さらにオリンピアードでは 202 回目の 3 年目に、至福なるマルシアルがいつも通りに祈っていると、b) 見よ、主イエスが言い尽くせないほど明るい輝きの中で彼に現れて、言った。「忠実なる兄弟

よ。あなたに平和があるように。あなたは私の声に従ったのだから、あなたは常に私とともに果てることのない輝きの中にあるだろう。」この言葉を聞くと、主の弟子は大きな喜びに満たされて、言った。c)「主よ、私はあなたのお顔を拝して、まるで墓から蘇らされたかのように、嬉しくなりました。なぜなら、あなたは私の主にして師、イエス・キリスト、生ける神の子です。私はあなたを見、知り、見守り、愛しました。常にあなたをはっきり見ようと望みました。あなたの甘美に満ちた声は、いかなる香料の香りにも勝ります。主イエス・キリスト、良き牧者よ、私はあなたのはかり知れない優しさを願います。あなたが私とあなたを愛するすべての者たちに約束した輝きへと、私が引き上げられるよう命じてください。」すると、主は彼に言った。「最愛の者よ。私は15日したらあなたのところにやって来よう。d)そして、あなたを天使たち、預言者たち、殉教者たち、また乙女や証聖者たちの群とともに受け入れよう。私はあなたをあなたの兄弟たちとともに立て、そしてあなたを彼らとともに私の王国の相続人としよう。」

聖なる方はこれらの言葉を聞くと、兄弟たちを呼び集め、自分の死期が迫っていることを彼らに知らせ、と同時に、彼がいかにしてこのことを主から教えられたのかを話した。e)それから彼は、説教によって主のために獲得したガリアのあらゆる地域と地方に使者を遣わして、皆に集まるよう命じた。それは、聖職者であれ俗人であれ、彼らに最後の別れの挨拶をしようとしたからであり、また同時に、彼がペテロや他の使徒たちとともに受けていたのと同じように、彼らに祝福と罪の赦しを与えようとしたからであった。f)さて、この知らせを聞いたすべての者たち、すなわち、彼が誤りから真実の道へと連れ戻した者たち、彼と出会うことができた者たち、あるいはさらに、彼の日々の生活の中でなされた際立った出来事を報告によって聞くことができた者たち、こうした者たちがたいへん悲しんで彼のもとへと出発した。すなわち、ポワティエ、ブルジュ、オーヴェルニュ、バスク、ゴート、そして多くの近隣諸国の人々が、彼が自分たちのもとから連れ去られる前に、彼の説教の救いに役立つ言葉と祝福の贈り物をもらいたいと欲していたのである。g)このようなわけで、神の人は、前述のように、彼が肉の束縛から解かれると主から告げられた後、苦行と、不断の断食と、連日の徹夜の行と、絶

え間のない祈祷の中で、熱心に祈り続けた。彼は、わずかな休息、すなわちほんの少し休んで体の疲れを回復させた後、夜の決まった時刻に祈るために起き上がると、朝の第2時まで、主に祈りと賛辞の供え物を捧げた。h) それからさらに、その第2時に、自分と自分がキリストのために獲得した信者たちのために、主に犠牲を捧げ、その後休むことなく、晩まで説教を行った。このように、彼は既に日が落ちた頃になって、自分に割り当てた、生きてゆくのに厳しいほどの食料、すなわちパンと水を取った。

XXV. a) 聖マルシアルは町の外で説教する。b) キリスト教の教義の要点。c) 謙遜のすすめ。d) 歓待の賞賛。e) 慈善行為の賞賛。f) 呪われるべき貪欲。g) 宴会好きの金持ちの例が挙げられる。h) 真に司教である聖マルシアルによって与えられた尊い祝福。i) 主への祈り。

さて、自分の死ぬ日が近づいたとき、その時に集まっていた者たち皆から、この世を去って永遠の王国に入る前に、励ましの言葉を与えて欲しいと求められたので、a) 彼は町の外のカルキネアと呼ばれている門のところへ行って、そこですべての者たちに説教を述べた。すなわち、b) 彼らがいかにして神を、つまりペルソナにおいて三つであるが神の本質において一つであり、父であり、唯一の父より生まれたひとり子であり、そして確かに父と子より発する聖霊である神を、崇めなければならないか、と。彼は自らの師である主イエス・キリストの洗礼、断食、彼が耐え忍ぼうと欲した悪魔からの誘惑について語っていた。彼はイエス自身から聞いていた教えを告げていた。彼は、イエス自身が行うのを見た奇跡について繰り返し語っていた。また、イエスがいかなる仕方で、あらゆる行為を通して、自分が真の神であり真の人であることを示したかを、はっきりと語っていた。彼はまた、人間について、すなわち律法や預言者においてどう書かれているのか彼が万事にわたってよく知っているような人間について、教えていた。そして、福音を述べ伝えるときは、主から教えを受けていた他の使徒たちが説いたことを認めていた。すなわち、神は、心から気持ちを込めて愛さなければならいと、そして各々は、神からいただくと望めるものがわずかであっても、そのために神を愛さねばならいと、説いていた。c) 彼は謙虚さとはどのようなものなの

かはっきり述べていた。というのは、主は、至高の神に似た者になろうと思いがった天使が転落した高所へと、謙虚さのゆえに上げられたからである。彼は、子なる神がいかにしてその肉を処女から得て、へりくだった者、貧しい者として、この世に生まれたのかを、繰り返し説いていた。それは、その貧しさによって我々を豊かにし(「コリント信徒への手紙二」8章9節)、その謙虚さによって我々が天に昇れることを教えるためであった。すなわちこの徳、つまり謙虚さが、他の徳を一つにまとめて保つことを教えていた。さらに彼は、彼が説いてきたこの教えは使徒の教えであり、その同じ教えは、真理を語る他の使徒たちがその当時散っていた世界の中で説いていたことなのだと、思い起こさせた。d) また、彼は、特に歓待はだれもが忘れてはならないことだと、注意を促していた。それは、多くの者たちが、歓待を行うことによって、主やもてなしを受けた天使たちに気に入られたことは証明済みであると、彼は語っていたからである。彼は、主が復活した後、既に日が傾いていたときに、エマオへ向かう二人の弟子からどのように歓待を受けたか、そして、主が聖書を理解するための感覚を弟子たちに開いてやって、パンを裂いたときに(「ルカによる福音書」24章13-35節)、二人はどのようにして主であることに気づいたかを語っていた。また、彼は、審判の日にやって来る主が、自分に従う者たちに次のような報酬を約束してくれたのだと、語っていた。すなわち、主は、「異邦人の装いをした自分をもてなしてくれた、だからこれに対し同じだけの報酬をその者たちに与えよう」と言うだろう、と。e) さらに、彼は、皆が愛の業を進んで行おうと努めるよう励ました。なぜなら、彼は、愛の業は多くの罪を覆い(「トビト記」12章9節、「シラ書」3章30節)、これがなければだれも他の善行を為すことはできない、と付け加えていたからである。また、これはすべての律法と預言者が基づいていた徳であり、そしてそれに違反する者は預言者や律法に対する犯罪者だと明言していたからである。さらに、彼は、彼らがいかにして貞潔で清く生きるべきかを、彼らはすべての行いについて公正な審判者に弁明することを分かっている必要はないことを、教えた。f) 彼はまた、貪欲はあらゆる仕方であらうと呪わなくてはならないとはっきり述べ、そして富める者たちに不確かな富を望むのではなく、神に自らの希望を置くように命じた。g) 彼らは紫の衣を着た金持ち

とできものだらけのラザロの例を常に覚えておかねばならないと明言していた。すなわち、金持ちはパンのかけらを拒んだために、水の滴を受けることができなかつたのである（「ルカによる福音書」16章19-26節）。

これらの、あるいはこれらに類する話を、日の出ている間中、彼は既に激しい発熱の影響で苦しみながらも解説したが、その間にも、h)彼は人々に次のような祝福を与えて、言った。「全能の神がその慈悲深さによって私たちを祝福し、救いとなる知識を理解する力を私たちに注ぎ入れてくださるよう。アーメン。私たちをカトリック信仰の教えによって養い、私たちが良き業を続けられるようにし、私たちの歩みを命へと向け、平和と愛の道を示してくださるよう。」そして、皆が「アーメン」と答えると、彼は再び彼らの方を向いて言った。「主があなたたちを祝福し、あなたたちを見守り、あなたたちを憐れみ、あなたたちの方に顔を向け、あなたたちに平和を与えられるよう。主があなたたちの保証人となってくださるよう。主はあなたたちを地の泥から造り、尊い血を以て買い戻しました。そして、その方の力は世々限りなく続きます。」再び彼らが「アーメン」と答えると、彼は主に向かって次のように言った。i)「主イエス・キリスト、良き牧者よ、あなたが至福なるペテロのお告げを通して私に渡した羊を、私はあなたに委ねます。それゆえ、あなたの人々をお守り下さい。それは、私が、あなたの恵みによって、水と聖霊で蘇らせて獲得した人々です。主よ、あなたにとってその者たちが特別な存在となり、またあなたが世の続く限りその保護者そして不滅の番人となるために、あなたが栄光ある血を以て買い戻した人々です。アーメン。」

XXVI. a) 聖マルシアルは聖ステファノの礼拝堂に運ばれる。b) 聖マルシアルの主に対する祈りと感謝の行為。c) 司教の貧しさ。d) 最後の祈願。e) 人々の涙。f) 天からの声。g) 聖マルシアルの魂が昇って行くのが目撃される。

かくして、説教と祝福を終えると、a)彼は、最初の殉教者で彼の血縁者である至福なるステファノを称えて、彼が建て、捧げていた礼拝堂に、自らを運ばせた。そして、そこで、彼は粗衣と灰を身にまとして仰向け

に横たわり、旅立ちを迎えた。彼は膝を立てて、頭と手を天に向けて、祈りに守られようと思った。そして、次のように主に祈りを注いだ。b) 「主よ、私の師であるイエス・キリストよ。あなたは私に、あなたに従って妻を娶らず、あなたにすっかり心を向けるようにとおっしゃいました。そして、あなたは、この時に至るまで、私の心と体をあらゆる汚れから守って下さいました。キリストよ、あなたは私を、この地に、生ける神の子を告げ知らせるために、遣わしました。あなたは苦難の中で私を見捨てませんでした。c) そして、私が天においてあなたから報いを受けられるようにと、私が地上において貧しくあることを望まれました。あなたがご存じの通り、私は貧者そして異邦人として、苦勞と危険のなか今日まで、あなたが私に赴くよう命じた場所を歩みましたが、あなたがそう命じたのは、私の信仰が消えることなく、そして命に対して抱いた希望がくじかれることがないためでした。私は第一、第二、第三の徹夜の行を守りましたが、それは、あなたのところに招かれて、婚礼の席であなたとともに食事に与り、そして永遠に楽しんでいられるためです。主よ、私の道をあなたに向けてととのえてください。それは、悪魔が私を攻撃しないためではなく、むしろあなたの光によって悪魔の目がくらまされ、その口が言葉を忘れるためです。また、私に近づくことができなないようにするため、あるいはあなたへと続く私の道をその企みによって乱すことができないようにするためです。私の師、キリストよ、命の扉をたたいている私に開いてください。恵み深い羊飼いや、そして私をあなたの栄光で包んでください。人類の敵が私のことで厚かましくも喜ぶことがないためです。」d) これらの祈りを述べると、最後に、彼は主に向かって次のように声を発した。「私が常に愛した、主イエス・キリスト、良き羊飼いや、私の霊をあなたの手に乗ねます。(「ルカによる福音書」23章46節)」

e) ところで、様々な地方から集まって来ていた人々は皆、絶えず嘆き、祈っていた。そして、呻き、涙を流してすすり泣き、天に届くほどの声を上げながら、自分たちに送られた牧者と離れてしまうのをたいへん恐れていた。しかし、彼は黙るように手で合図をして、泣いている者たち皆に言った。「黙りなさい。これほど多くの賛美が天から届いているのが聞こえないのですか。確かに、主は約束通りやって来られます。」す

ぐに、彼の声に対して、太陽の光がそこで7倍にも輝いたかのように、大きな光がその場所を照らした。f)そして、次のように言う声が聞こえた。「祝福された魂よ、この体を出なさい。あなたは遠い国々や地方をめぐってやって来た。そして私の言葉に従って、親族と故郷を捨て、私に付き従った。それ故に、あなたは来る日も来る日も、果てることのない輝きの中で私とともにあるだろう。」皆がこの言葉を聞いた後、g)彼の魂は、あらゆる光とともに、天へと昇った。6月30日のことである。そこに居合わせた者たちは皆これらのことを見ており、そして神を賛美した。実際、天使たちの合唱が次のように歌うのが聞こえた。「主よ、あなたが選び、用いた者は祝福された者。その者は世々限りなくあなたの幕屋で暮らすでしょう。」

XXVII. a) 体の麻痺した男が棺に触れて癒される。b) 開かれた天。c) 彼の葬儀でなされた奇跡。d) 病人たちが聖マルシアルの顔を覆った布で触れられ、癒される。e) トゥールーズの町から来た水腫を患った男が4人の取り憑かれた者たちとともに癒される。f) 聖マルシアルの顔を覆った布の力。g) 先述の文体と同様のアウレリアヌスの文体。

a)翌日、日中の第3時になったとき、手足をまったく動かすことのできないある麻痺した男が聖マルシアルの棺にふれると、彼は即座に癒された。そこに居合わせていた人々は皆、これを見て神を賛美した。神はその忠実な僕にそれほど大きな好意を与えられたので、その者たちは肉の束縛から解かれても、肉をまとった者たちを癒し、患っている者たちに健康を回復させることができるのである。確かに、彼の亡骸が埋葬のために運ばれ、聖ステファノの聖堂を出たそのとき、b)天が開かれ、天は開くことによって、皆に、彼の聖なる亡骸が運ばれて行くべき道を示した。天は、彼らが埋葬場所へ到着するまでずっと開かれたままであった。そこでは、どれほどの涙が、人々のどれほど限りない悲しみが、聖職者であれ俗人であれ、彼らのどれほどの悲嘆がわき起こったことだろうか。私が千枚の舌を持っていたとしても、語ることはできないだろう。c)さらに、葬儀には、取り憑かれた者や、盲人や、様々な病気に苦しむ者たちが大勢集まって来ていた。彼らはほとんど彼を見ることができなかったとはいえ、彼に会うためにやって来ていたのである。d) ところ

で、その聖性ゆえにもっとも輝かしい弟子、至福なるアルピニアヌスは、彼の顔を覆った布を受け取ると、それで病人の体に触れ、そしてキリストに祈願して、多くの者たちに健康を回復させていた。確かに、至福なるマルシアルの顔を覆った布に触れて、即座に健康を回復しなかった病人は一人もなかった。実に、様々な地方からやって来ていた他の病人たちの中でも、ある水腫患者のことを我々は黙って見過ごすことはできない。e)彼はトゥールーズの町から盲人の集団と4人の取り憑かれた者たちとともにやって来たのだが、彼らは、このキリストの弟子が天に上げられた翌日に、彼の墓所に姿を現わしたのであった。f)彼らを見ると、至福なるアルピニアヌスは、習慣通りに、いとも聖なるマルシアルの顔を覆った布を受け取り、そして彼らに当てて、健康をすっかり取り戻させた。埋葬された後、この尊い人物を介して、キリストの慈悲は多くの、いや無数の奇跡を行った。これらの奇跡が書かれるとするなら、全体で何巻もが必要となるだろう。g)また、これら彼を介して為されたことは、理解力の弱い者たちからは偽りであると言われるだろう。しかるに我々は、我々が確実に知ることができた限りにおいて、教会を強くすることに必要なことだけは黙って見過ごすわけには行かなかった。それほど輝かしく立派な主の弟子にして使徒について、語るべきことすべてを、明瞭に記述したとは言えないが。しかし、おそらく、この書物に満足しない者は、もっと大きな書物が書かれたとしても満足しないだろう。現世にいる我々に、天に住む敬虔な牧者が助けとなってくださるように。それは彼の祈りに強められて、我々が永遠の遺産への参与者となり、世々限りなく栄光ある方、我々の主、イエス・キリストの王国で、聖人たちの仲間を受け入れられる者となるためである。アーメン。